

# 開けゆく県経済に思う

山崎良也



熊本県の掛けがえのない財産は、彼の雄大な阿蘇と、それを取巻く、自然の景観、人跡未踏の地を想わせるような深山幽谷、それにコバルト・ブルーに輝いた太陽と海、天草であると思う。また他県から来た人も異口同音にそういつているようである。

だが、この財産の価値を、カネで表現する所得概念に含めることは途方もなくむずかしい。もちろん国民所得概念を一種の福祉概念に再構成して国民純福祉という新しい概念を確立する試みが企てられてはいるが、それも一面思维的になるという難点もあり、現段階ではいまだ不十分である。

経済上価値の程度を測れるのは現今ではカネではない。幸福の尺度も経済上カネでしか測れない。ただし、ここで幸福というのは「経済的幸福」のことで、

「精神的幸福」を意味しない。たとえ十萬円の給料取りのほうが二十萬円の給料取りよりも家庭的・精神的に幸福だとしても（實際上その程度を測るのは困難であるが）、前者より後者のほうが経済的幸福の度合いが大であると考えるのがごく自然であろう。

さて、先般昭和四十七年度熊本県民所得の推計が完成をみた。これによると、県内純生産の名目増加率は一八・四％、実質総支田の増加率は一一・六％で、前年度にひき続き国全体の成長率を名目で一・四ポイント、実質で〇・六ポイント上回り、一人当たり県民所得も一人当たり国民所得との格差を縮小した。昭和四十七年度の日本経済は昭和四十六年十二月を底入れとした景気の回復から上昇に向かう時期だけに、そのおわりで本県経済も高い成長率を維持したものであると思われるかもしれない。しかし、産業構造を仔細に観察すれば、本県産業の進展は国のそれと幾分明暗を異にすることがわかるであろう。

まず、産業別純生産の構成から見ると、増加率の大きい産業から順に指摘すると、卸売・小売業二九・〇％、農業二三・五％、建設業二三・一％、金融・保険・不動産一九・三％となっている。これが国全体になると、金融・保険・不動産二六・二％、建設業二〇・〇％、サービス業一九・九％、農林水産一七・六％、

卸売・小売業一五・九％と続くのである。今回本県の県民所得を増加させた立役者は何と云っても農業、建設業、卸売・小売業であったといえそうである。そこで、全産業の増加分を一〇〇として、各産業の増加分の占める割合をかりに寄与率と呼ぶならば、この寄与率概念を用いて上のことをもっと確かめてみよう。

この寄与率によると、卸売・小売業が一八・四％の寄与率、サービス業が一八・二％、農業一五・〇％、製造業一一・〇％、建設業一〇・四％となる。これで見ると、農業や建設業の寄与率は思ったより低く現われ、それらが産業成長の推進者だとは到底見えないかもしれない。しかし、卸売・小売業やサービス業は農業や建設業の繁栄を支えられて伸びていること、国全体の農業や建設業よりも本県のそれらが寄与率において遙かに高いという事実を見れば、農業や建設業の貢献度が大きかったといわねばなるまい。

農業の伸長は収量の増大、米価引上げなどによるものであり、建設業の伸びは公共投資、民間住宅建設の増加に帰因するといつてよい。翻って県内総支田の内容をみるに、財政の固定投資は四二％も伸びたのに対し民間のそれは九％にすぎない。他方、国

全体については前者が二〇％、後者が二〇％程度と、ほぼ両者は均衡して伸びている。今回の本県の経済成長を一口でいえば、財政投資と豊作に支えられた経済成長といえよう。

非工業業としての本県経済は国の税収の再配分を通じて他の工業県から一部間接的財政援助を受けているといつても過言ではない。自主財源不足に悩み、地方交付税、国庫支出金等国への依存が七割以上を超えていることが如実にそれを物語っている。この诗情豊かな、緑なす美しい熊本の自然を保護できたのも、他県における自然の破壊という現象があったればこそというわけである。

最近関東から引越してきた知人が、緑濃い山間部の静謐そのものの息吹きに驚き、日本にもまだこんな素晴らしい所があったのかと感嘆した。そして一人当たり県民所得が国のそれに及ばぬとしても、贅沢を言ひさしななければ、山紫水明の地で悠然たる生活を満喫できるのはこの熊本を他にはないといつていた。けれども、その広大な山紫水明の地において、都会に比し文化施設などに乏しい環境を物とせず、天与の財産の保護に営々と努力している人たちの尊い姿があることを想わなければならない。一時の感動で吐かれたような言葉もたんなる感傷として空ろに響くだけであろう。

# 消防マンの技術大会

県下から224人が参加



(熊本日日新聞社提供)

県・県消防長会主催による、「第一回県救助技術大会」が、七月二十五日熊本市横手町の県消防学校に県下十二の消防本部、消防署から二百二十四人の消防マンが参加して行われました。

技術大会は、災害時の救助活動にそなえ、実際に役立つ専門的な救助活動を身につけようとする行なわれたもので、本番さながらの技が競われました。

